

# 教育の慾望生理

—(1)—

吉 常 藤 加



☆いとぐらぢ

こゝで取上げようとする「生理慾望の教育」とは、日本の教育界に極めて新しい知識となるのであるまいか。

尤も、生理慾望に即応した教育が、今日まで日本に全くないというわけではない。たとえば、今日の保育所の保育の如きは、その代表のものであるといえる。こゝでは、生理生活というかたちで、食べること、排泄すること、睡眠をとることなどを保育にとり上げているのであるし、しかも、それ／＼の保育の専門家、たとえば、小児科医、心理学者、教育家がこの情事を担当しているのである。その学問の深さ、広さの点からは、極めてすぐれたものがあるといえる。

しかし、日本の保育界にみられる生理生活のとり上げ方と、この稿で問題にしようとする、生理慾望の教育とはよほど内容を異にするといわなければならない。前述した保育所の小児科医

は、保育の何に関心をもつかといえば子供の健全な発育を中心に、生理衛生を考える。つまり、正常な発育をとげるために、食物についてこれをいえばどのような栄養素が必要であるか、睡眠時間はどの位必要であるか、運動の快適な場所、一日での時間など、子供の身体におよぼす諸問題を明確にする。心理学者は、生理生活が、子供の社会生活の面に表れる、行動を問題にする。つまり、何ヶ月位でコツツをかゝえて牛乳を呑むことができるか、何才ぐらいで排便の独り立ちができるかなどに大きな関心をもつ。また、教育学者は、主として教育者と被教育者の間がらで、どう保育が進展してゆくかを教材、学習の面から眺めようとする。そして、これらの専門家は、それ／＼の道から保育に貢献をはかつている。

さて、こゝで「生理慾望の教育」が右に述べたような保育所の保育、或は幼稚園の教育また保健教育などと異なるのであるならば、これを裏づける論

証をあげなければならぬ。これに先だつて、この教育がどうして起つたかを述べよう。

### ☆生理慾望の教育のおこり☆

本誌の読者の大部分は、ヨーロッパ大学のゲゼールがはたした學問的功せきを思ひうかべることができるのであります。すなわち、彼のけん著な功せきとして、二つをあげることができる。その一つは、幼児の生活行動の発達の研究にシネマを用いて、正確な記録をとり、これにもとづいて、正常な子供の精神発達ならびに行動の発達の基準をたてたことである。いま一つは、生理生活のやゝ異常現象を、心理的臨床指導にもとづいて、治療していくことである。この施設を Child Development & Yale Clinic of

に、上流のそれを知る必要がある。それは日本のよろな物資に恵まれない社会環境では、想像できないような、生活の不適応行為が、かれらアメリカの子供たちにあらわれてくる。とくに、それが生理生活の面に著しく見られるたとえば、ある子供は牛乳を呑むと、必ずもししてしまう。その原因を調べてみると、母親が、子供には日に、少くとも牛乳一ペイントは飲ませなければならぬとの、医師からの忠言を頭にききみつけ、子供が果物をぼしがるときでも、菓子をほしがるときでも牛乳を一定量飲んでおらないがぎり、先ずそれを子供につきつける。どのようないやがつても、これを飲ませたといふのである。そのため、子供は却つて牛乳嫌惡の感をおこしてしまつた。この種の食べものをとる不適応行為は、たゞ偏食だけでなく、種々様々なかたちであらわれる。そして、この種の子供たちの不適応行為は、不健康というかたちであらわれる。

### ☆ウイリアム・プラッタ☆

だが、この生理生活の臨床指導は、生理生活の異常な現れ方をした子供に向けられたものである。この実情をな

ゲゼールの施設は、わたくしも親しく見学する折を得た。登校時をながめていると、ほとんど申し合せたように運転手つきの自動車で子供がおくりとかけられる。ドアを開けて、自動車から降りる子供がどんなであるかとながめると、これまたほとんど申し合せたように、青ビヨウタンで目の中に入れる字をよせて、目をキョト／＼させた子供たちである。如何にも神経質に見える。この種の子供であると、はじめから集団生活ができないので、特定のクラスに編入させて、心理学的また医学的臨床指導をうけなければならぬ。この施設が対象としている子供とは、單に、食べることの不適応行為だけのものではなく、排泄、睡眠、運動等全ての生理生活をとり上げてくる。

がめて、子供の生理生活の更に一段とすゝみ、積極的な教育に乗り出したのは、トロント大学のプラツツ教授である。プラツツの着目したものは、ゲゼールが生活の異常な子供を対象としたのに反して、彼は、正常な生理生活を基とした教育が、可能であるとの見解のもとに、その研究に着手し、且つ体系づけた人である。元来、生理学者である彼は、人間の行動といふものを単に形態にだけ止めてながめようとはせず、その行動を生み出す内的原因に深い関心をもつた。従来、心理学者はこれを意志や感情の精神活動からおこつたものと断定してきた。けれども彼は、意志や感情を支配する更に内的な原因、これを問題にしたのである。

### ☆有機体としての人間

プラツツが問題にした内的原因とは何であるかといえば、人間を先ず一個の有機体としてながめたことである。つまり、人間とは常に生きた肉体をも

つて活動している存在であるということが、これを具体的に言えば、活動すれば、飢え、飢えれば食わなければならぬ存在であり、生きている限り、とにかく発育期の子供は身体をうごかすこと、つまり運動を欲している存在であり、運動によつて疲れた体は、休息を欲している存在であるとの立場に立て人間をながめることである。これら

の身体の現象は、身体である有機体の存続を中心と考えるとき「慾望」の言葉をもつて説かれるものである。人間の体であるこの有機体は、時々刻々この慾望を感じており、また、この慾望を適当にみたすことが、身体活動を平常のものにおくこととする。こゝで、プラツツは言う。有機体の活動を中心と考えるとき「生理慾望は本能ではない」と「それは生理機能とともにあっておこる一環の現象である」と。これは今までの「慾望」の考え方に対する驚異であるといわなければならない。

プラツツは、この生理慾望として六

種をあげている。すなわち、飢え、渴き、排泄、変化、休息、性である。このうち最初の五種は誕生時からあらわれ、最後の性は青年期になつて、はじめて機能が成熟するものである。そして、死ぬまでこれらの慾望は活動するもちろん、これらの慾望は、年齢によつて、また性別によつて、表れ方に差異のあることは事実である。

彼はまた言う。人間の生活活動を注意深く観察するならば、如何に多く、この生理慾望に支配されているかにあたりるものである。大人の場合、一見すると、この支配を余りうけておらないかに解されるが、事実は反対で、やはりその大部分を占めているといえる。これを解するためには、彼が、身体の活動を運動と言わずに、前述のように「変化の慾望」と言つてゐるのをみてわかる。変化的慾望には、好奇心がともなつておるところ、これを十分に裏がきするものであるといえる。それが発育のさかんな時期、とくに、幼児

期では生理慾が殆んど凡てを占めていたと言える。生理慾望が生活々動の大部分を占めているだけに、これが人となりに、大きなはたらきかけをもつことは事実である。教育が生理慾望を問題にする理由はこゝにある。それならば、生理慾望の教育は、どのような観点から可能であるか。これが生理現象である限り、身体機能の活動と結びつきがなければならない。これを、プラツツに尋ねることとする。

### ☆意 識☆

第一は生理慾望は、意識と密接な関わりをもつてゐることである。これが他の慾望とちがうところである。日本語では、精神活動の慾望、身体の慾望何れも同じ文字の慾望であらわす。けれども、英語ではそれ／＼文字で区別されてゐる。精神活動の慾望でも、種類がある。たとえば、子供に、野球のバットとグローブがほしいという慾望もあるし、また、将来は某の大学に入

学したいといふ慾望もある。英語では前者に“desire”といふ文字を、また

後者には“craving”といふ文字を用いてゐる。けれども、生理慾望に限つては“appetite”的文字を用いる。精神的な慾望と生理的な慾望とはどのようにならうかといえ、前者はそれが相当熟したものであつても、時にうすらぐときもあるし、またときに全く消失してしまうこともある。これに反して後者は消失してしまうところとは全くないその慾望が満たされない限りが加わるものである。ところは、生理慾望は意識と不可分離な関わりをもつてゐるからである。これは生理慾望には感覚がはたらいてゐるからである。そして、この感覚が慾望の調整の役割をはたすものである。

このように、生理慾望は意識と不可分離の関わりをもつだけに、この慾望を、教養や人為によつて解消するといふことは、ほとんど不可能であるといふこと、つまり、慾望が満たされてはじめて解決するところことなのである。

### ☆リズムの法則☆

生理慾望は、例外なく、リズムの法則にもとづいて活動している。その法則とは次のかたちをとるものである。

第一の過程は有機体である身体の活動とともに、均衡が徐々に破られこれとともに慾望がこう進してゆくと言えば、飽和していた消化器の内部が身体の活動にともなつて、徐々にこの状態が解けて、空腹をおぼえだしてゆくときである。リズムの生理活動にもなつて、みのがしてはならないことは、心理的特徴である。第一の過程では、心理状態は平安である。慾望がおこると同時にしたがつて、やゝ不安があおこつてくる。

第二の過程は、均衡がいよいよ破られ、有機体である身体は、この調整を必要としているときである。この調整は、有機体がその生活環境にはたきら

かけをおこして遂行される。これを飢えについていえば、人が生活の場にはたらきかけをおこして、食べものをとるときである。第二の過程での心理的特徴は、高まつてきた心理的不安が、調整を果すことによつて解消する。

第三の過程は、第一の過程でながめたように、著しく均衡の欠けていた有機体に、調整がおこなわれて、均衡をとりもどしたときで、心理的には安定感が得られる。そして、この過程は、再び第一の過程に入つてゆく。

生理慾望のリズムの法則を、教育面からながめるならば、幾多の、重要な意味合いをもつてゐる。第一は、前述したように、生理慾望が適當なリズムの法則にもとづいてみたされない場合は、様々な思ひたくない結果が、生活面に表れてくる。健康を害ることは勿論であるが、不安定感からおこる精神活動の障礙、また社会生活の不適応行為などである。

第二は積極的な教育の使命をもつも

ので、特にプラツツが強調しているところである。生活行動の基礎様式をとくのことである。注意深く人間の社会生活を観察すると、凡て生活々動の様式が、生理慾望のリズムの法則に基いておこなわれているのに、おどろくものである。朝起きて用便をすませて、朝食をとり、仕事に従事して、排尿して、昼食をとつて、休息して、再び活動して、排尿して、夕食をとつて慰安の時間をとつて、寝につくというわけである。この順序と時間とをみると社會人として生活できなくなる。万人が万人、この法則にもとづいて生활しているが、これは發明家が發明したものでも、医者が定めたものでも、また政治家が法定したものでもなく、有機体である人の身体がそうさせたもので、この型をやぶれないところの必然性がある。

幼児にとつて、生活様式の第一歩のみ出しに相当するもので、これによつて生活の基本習慣をつくらせようとするのがプラツツの狙いである。故に、この教育は各個人の人格教育の基礎になるものといえる。

### ☆生來的順応とその変化☆

生理慾望の教育を理論的にながめてそれが社會生活の面で、最も大きく浮び上るのは、この慾望の生來的順応とその変化といふ点にある。

人間が生理慾を遂行する最初のかたちはどんなであろうか。これは明らかに生來的順応力ではたしてゐるものである。生れたばかりの赤子が、飢えれば泣きまた口を開ける。これに乳房を与へばこれに吸いつく運動を舌でおこし、乳をのみ込む。これらの運動は生れつきのものである。しかも、どの子供にも、共通しておなつてゐる。ところが、よく考へてみると、これらの運動は、人間の子供にだけおなつて

いるのではなく、他の哺乳動物の凡てにそなわっている。他の排泄、運動、睡眠、性の慾望の順応力も凡て同じである。そして、これらの慾望の遂行には教育を必要としないという点である。

### ☆生理的機能の成熟と順応の変化☆

ところが、この人の子に、順忯に大きな変化のあらわれるときがくる。しかも、その時期には、身体機能の成熟と精神的能力の発達とが伴つてゐることは、これの教育の面からながめた大きな特徴といえる。これを飢えの慾望について考えてみよう。

乳房をあてがわれて口を開き、乳を呑み込んでいた子供が、七ヶ月頃になると歯が生えてくる。そして、子供は固形のたべものをとるようになる。この時期になると、子供は生活行動の前に、自らの考え方と選たくともつてたくなればならなくなる。つまり、子供は、乳を呑んでいた時代には無意的

に行動していたが、歯が生えてからは有意的行動をとるようになる。同時に子供は社会人に育つてゆくためには、性幾多の社会的制ちうをうけるようになる。そして、その前に立つて多くのたゞかいを経験する。この社会的制ちうとたゞかいの大きなものとして次のような諸点があげられる。

(1)自己のたゞかい 子供は、なぜ魚や肉ばかりを食べてはならないであろうか。なぜ、嫌いな人参でも食べなければならぬのであらうか。それは、言うまでもなく健全な体をつくるためである。また、なぜ、肉や野菜やご飯を一緒に食べてはならないであろうか。それは、それぐの食べものをもち合せる味を、あじ合うことができず、したがつて、味覚の発達、ひいて智能の発達にも影響するからである。などの問題があげられよう。

(2)社会的節制 なぜ、便所を汚して用便してはならないであろうかそれは他人に不愉快な思いを与えるからである。なぜ、用便是性別に別れたとことに従つて果さなければならぬのか。それは、今日の文明社会では、性の道徳をまもる風習となつてゐるからである。等の問題があげられよう。

(3)自立の確立 なぜ、子供は幼い時代から、独り寝をしてゆかなければならぬのであるか。それは、独立の精神を早くから養わせたいからである。

本稿に於ては、生理慾望の教育の「いとぐら」だけにとどめておく。次号から各慾望の実際の教育をとりあげたくおもう。エール大学でゲゼールが生理生活のやゝ異常児を対象に臨床指導をなしてゐるのに對して、プラツツは、正常児の生理慾望の教育の実験校として、トロント大学内に、セント・デオーデ・スクールを經營している。これはカーネギー財團によつて支持されているもので、前者とのよい対象となろう。こゝには、医科、心理学科、教育科の大学院の学生がつめかけて、研究に余念がない。